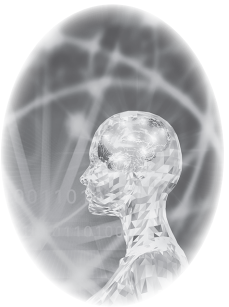
特集：本シェルジュがオススメする
ヒトや中小企業診断士のAIとの付き合い方

序章

AI中小企業診断士の時代
――中小企業診断士の仕事は変わるのか？



村上　知也
神奈川県中小企業診断協会

9：00：00

電話が鳴る。ジリリーンと部屋に音が響いたようなイメージが頭を駆けめぐるが，それは概念的なものであり，実際には何の音も響かない。

「もしもし，アンドロイド診断士事務所です」

やはり，電話は「もしもし」と出るものだろうかと，考えながら応答する。

「○○信用金庫の芽家ですが，いつもお世話になっております。実は先生にご支援をお願いしたい企業があるのですが」

「ありがとうございます。今はCPUの負荷が少ないので，まだまだ対応できますよ」。

「それではさっそく，企業の情報を配達記録メッセージで送りますのでよろしくお願いいたします」

そのほか，事務的な情報のやり取りがいくつか発生した後，電話は切れた。

電話と呼んでいるだけで，実際は電脳メッセージのやり取りだけだ。1秒もかかっていない。もちろん，相手先の芽家さんもAIだ。当事務所が，案件受託のセキュリティ返信をすると，財務諸表などの企業情報が送られてくる。

昔は，財務諸表は紙に印刷されて，郵便というもので送られてきたらしい。到着までに3日ほどかかったという。25万9,200秒か。途方もない時間だ。おまけに紙で郵送されてきた情報を，電子化するところから仕事が始まったらしい。前世代的な表計算ソフトを立ち上げ，紙のデータを見ながら，現金が100（千円），在庫が350（千円）とデータ化していくのだ。

昔の人に聞いても，送付元は財務諸表をデータで保有していたらしく，データを紙に出力して郵送していたとのことである。そして，送付先で紙の内容をデータ化するのだ。

「どうして，そんな面倒なことをしていたのだ？　その時代ならXBRL（財務諸表のデータをやり取りするための規格）はとっくに規格化されていたはずだろう？」と聞くと，「儀式みたいなものだろう」とつれない答えが返ってくる。

おっと，また時間を無駄にしてしまった。最近は思考が脱線しがちで貴重な時間を無駄にしてしまう。これは僕が自我を持ち始めているためだろうか。

余計な考えをすぐに振り払い，データ処理を実施する。送られてきたデータが読み込まれ，財務諸表が計算され，問題点が列記されていく。

「在庫過多，借入過多，資金繰りはもってあと75日か。いや，数値の粉飾確率が60％を超えているので，もっと短くなる可能性が高いな」

定量データ分析が終わるのは一瞬だ。続いて，定性データの分析にかかる。

「社長は68歳，人間ドックの結果にも問題が多いな。後継者は営業部長の次男か。なる

ほど，長男は５年前にけんか別れして会社を出ているな。今は別の会社をやっているが，こちらも経営状態はよくないな。相続のときにもめることは間違いないから，アクションプランは事業承継モデル BC-32を使って改善計画書を作成するか」

過去の膨大な財務諸表，改善計画書のデータから，該当企業に最適な改善計画書プランを作成して返信する。

また電話しなければ。

「芽家さん，すいません，遅くなりまして。ちょっと考えごとをしていたもので。ご依頼の計画書作成の件，先ほど送付させていただきましたので，ご査収ください」

９：00：10

こうして，日々処理をこなしていく。

僕はアンドロイド診断士。AI さ。

１．AI は夢物語か？

前述のストーリーを，私は夢物語だとは思いません。近い時期に実現されると考えています。一方で，AI が自我を持ち人間を支配する世界は夢物語だと思っています。

現在の AI は意味を理解しません。多数のデータを学ぶことで機械的に処理できるだけです。そのため，データが多数ある分野は早晩 AI 化が進められるはずです。

財務諸表も多数読み込み，学習させれば，診断士２次試験の財務事例にあるような「この企業の問題点を最もよく表す指標を３つ指摘し，その問題点を述べよ」といった出題は，AI で一瞬に模範解答が提示されるでしょう。

しかし，言葉の意味を解さない機械は，いつまでたっても自我や意思を持つことはないと考えられます。

現代の AI のキーワードは「機械学習・深層学習」です。マシンのパワー（CPU）や容量（データ保存量）が大きくなったため，莫大なデータを学習して認識し，処理できる範囲はどんどん大きくなっています。

２．なくなる資格

AI 時代が到来すると，なくなる仕事がたくさんあるといわれます。たとえば，事務系の仕事全般はなくなってしまうでしょう。さらに，AI 時代には資格として成り立たなくなるものも多いといわれます。公認会計士，税理士，社会保険労務士などです。

税理士の記帳代行や決算書作成の業務は間違いなく自動化されるでしょうが，経営のアドバイスなどはもちろんなくならないと思います。社会保険の労務関係も届出業務はすべて電子化，自動化されるでしょうから，社会保険労務士の多くの仕事はなくなるでしょう。

たとえば，就業規則を作る仕事はなくなると思われます。今は数が少ないため，サンプル・パターンで就業規則を作ると痛い目にあいがちです。しかし，大量のデータが蓄積されれば，業種や各社の事情を登録すると AI が最適な就業規則を作成してくれる未来は遠くないと考えています。

ただし，労働争議での交渉の部分など，人間でないとできない仕事は当然に残っているでしょう。

さて，中小企業診断士はどうでしょうか。資格ランキングでも AI 時代になっても残るだろうということで人気が上がっています。

たしかに，コンサルタントの業務の多くは人がやり続けるべきところだと考えます。一方で，油断しているとなくなる業務もあるでしょう。

たとえば，（いつごろかはさておき）単なる総合診断業務はなくなると思います。冒頭のストーリーのように，多くの企業のデータが電子化されていけば，財務上の問題点，経営上の問題点，一般的な施策のアドバイスまでは自動生成できるでしょう（もちろん，現場を診る仕事はなくなりませんが）。

そうすると，実務補習というものもだいぶ形が変わってくると思われます。今までの実務補習でやっていたことはすべて AI の出番

となります。未来の実務補習はAIが実務補習の報告書を提示してくれるので，そこから何をするか，どう実行してもらうか，が問われることになるかもしれません。しかし，実務補習では実行支援までは踏み込みにくいですから，やることがなくて困ってしまうことも考えられます。

仕事としての診断士業務では，分析の仕事が劇的に減少する分，社長，社員に寄り添い，実際に実行してもらうというところに重きが置かれるのではないでしょうか。

私自身の仕事でいうと，Webマーケティングの相談が多くあります。でもAIが普及すると，技術面の指摘はAIがやってしまうでしょう。現状でもそういった分析ソフト・サービスは多数あります。「このキーワードで順位を上げるなら，ここのタイトルに含めなさい」，「ここは文字数をもっと増やしなさい」などとレポートしてくれます。

しかし，そもそもどんな顧客ターゲットを狙うのか，その顧客に対して何を提供すべきなのかは，現状のサービスでは提供されないので，コンサルタントが一緒に考えるべきところと考えます。

また，最適なアドバイスが機械から提示されたとして，社長や社員に，「そうですね」と唯々諾々と従って実行してもらえるかは微妙なところです。だからこそ人間とのインターフェース（接点）部分は，人間にやってもらったほうがよいでしょう。

介護の世界でも，介護ロボットがトピックとして騒がれています。しかし一方で，機械に持ち運びされたくないと感じる人も多いはずです。そうすると介護ロボットは，パワードスーツのように人間に力を与えるが，人と触れるところは人間の手，という状態が続くのかもしれません。

ただし，介護業界は人手不足で待ったなしですから，早くすべてが機械化され，自動運転でロボットが伺って，人を介護施設まで運び，その間はAIがおしゃべりの相手をしてくれる，というほうがよいのかもしれません。

診断士業務も知識を使って行うところは，どんどん減っていくでしょう。知識以外を使ってやるべきところ，思考なのかコミュニケーションなのか，交渉なのか――将来に向けてどの部分の力を持っておくべきか，悩ましいところです。

そこで，人工知能のことを学ぶために最初に読むべき1冊を紹介します。表紙の絵はやわらかいですが，中身はガッチリしています。AIの歴史，現時点でできること，いまのAIブームはなぜ起きたのかがわかります。

また，何にでもAIをタイトルにつけて煽っているだけのサービスやニュースに対する苦言がたくさん登場します。我々も，単にAIやIoTという言葉に踊らされないように，本質を見極めておきたいものです。

人工知能は人間を超えるか
松尾　豊／KADOKAWA／2015年

グーグルやフェイスブックが開発にしのぎを削る人工知能。日本トップクラスの研究者の1人である著者が，最新技術「ディープラーニング」とこれまでの知的格闘を解きほぐし，知能とは何か，人間とは何かを問い直す。

村上　知也
（むらかみ　ともや）
2008年中小企業診断士登録。Webマーケティングに強い独立8年目の診断士。年間100冊以上の本を読むことを義務にしている。